

発見! おごおり遺産

No.27 伊勢参り

江戸時代に大流行した「伊勢参り」。ピーク時には、年間400万人以上の人々が訪れました。今回は市内の「伊勢参り」の記憶をたどってみます。



若宮八幡宮の狛犬と「伊勢講連中」の文字

玉垂御子神社の鳥居と灯籠の「伊勢神宮」の文字

江戸時代になって社会が安定する
と、人々は少しずつ旅に出るよ
うになりました。本州から九州への旅
人は、長崎を目的地とする人が多く、
途中で太宰府を観光することもありま
した。

九州の人は、武士は参勤交代や公用
の旅、一般の人は寺社参詣の旅に出か
けました。小郡周辺の人は、久留米藩
内の寺社巡礼や宰府参り、彦山参りに
出かけましたが、一生に一度の旅だっ
たのが伊勢参りです。

天照大神(内宮)と豊受大神(外宮)を
まつる伊勢神宮は、室町時代以降に広
く信仰されるようになります。江戸時
代になると、神官が御師として全国を
回って祈祷し、お札(御祓大麻)や曆
(伊勢曆)を配って伊勢参宮へと勧誘し
ました。御師は、実際に参詣にやって
きた人々の宿泊を手配するなど、ツ
アーガイドの役割も果たしました。

伊勢参りの際には、京都・奈良・大
阪など周辺の観光も行うため、1か月
から2か月の旅になることがほとんど
でした。これには多額の費用が必要と
なるため、各村で「伊勢講」と呼ばれる

組織を作り、仲間内でお金を積み立て
ました。また、代表者が伊勢に参るこ
ともありました。

市内の多くの神社に、伊勢参宮を記
念した「参宮記念」や「同行」と彫られた
石造物が寄進されています。そのほと
んどは明治30年代以降のものですが、
八坂の若宮八幡宮に江戸時代に遡る古
いものがあります。境内の狛犬の基礎
石には「嘉永七甲寅年」、「伊勢講連中」
という文字が彫られており、嘉永7年
(1854)に伊勢講の人々によって寄
進されたことが分かります。

大板井の玉垂御子神社には、伊勢参
宮に関連した10基以上の石造物が寄進
されています。内容は鳥居・狛犬・灯
籠などで、市内では最多の数です。

横隈の隼鷹神社本殿手前にある灯籠
の基礎石には、「伊勢日光参宮同行中」
とあり、伊勢神宮だけでなく、日光東
照宮にも参詣したことが分かります。

ともに伊勢に参った人々は家族より
も絆が強いと言われ、終生の親交を保
ちました。寄進された数々の石造物は、
その絆の強さを現在に伝えています。

問合せ先 文化財課 ☎75・7555

おごおり遺産とは?》》近年の市内調査で「再発見」した文化遺産=市民のたからのこと